



官能肉食小説

隠れ里

作者

大黒達也

# 『隠れ里』

作者 大黒達也

## 【あらすじ】

樹海の奥深く、人知れずその村は存在した。数百年の長きに渡り延々と続けられる人肉食の儀式。死を求め、樹海を彷徨歩く、若くて美しい女達。彼女達を待っていたのは、死ぬことより苦しい生き地獄であった。

妻子ある男との不倫の末に死を選び、全裸で山菜とともに釜茹でにされる女子大学生。ミス日本も及ばないほどの美貌を持つ、OLは生きたまま、その身を鋭い刺身包丁で切り裂かれ・・・。

## 【登場人物】

白石<sup>しろいし</sup> 深雪<sup>みゆき</sup>

女子大に通いながら、妻子ある年上の男と

不倫に落ち、最後には捨てられた薄倅の女。  
年齢は二十歳、類まれな美貌とスタイルの持ち主。絶望の末に、樹海に身を投じ、死地を求め彷徨歩く。

工藤 真弓

警視庁公安部外事一課警視。警視庁一の美しい容貌肢体を持ち、テロリストを単身で殲滅させる凄腕の持ち主

香田 里奈

警視庁公安部公安課警部補。スタイルが良く顔立ちも目鼻立ちがくつきりとした美人。コンピュータを使った情報収集能力に長けている。

大石<sup>おおいし</sup> 美奈<sup>みな</sup>

最愛の恋人を不慮の事故で失った女。モデルのように美しい容姿を持ち、職業はOLで、年齢二十三歳。絶望の淵のなか、無二の親友である熊木曜子と樹海に入り、心中を図る。

熊木<sup>くまき</sup> 曜子<sup>ようこ</sup>

最愛の両親を飛行機事故で失い、生きる希望を失った女。美しく大きな瞳を持ち、グラマーな肢体を持つ女。職場の同僚で親友でもある大石美奈とともに樹海を彷徨歩く。

その他の性交奴隷兼食肉となる女達

樹海の暗黒に捉われ、激しい凌辱の後に、食肉として調理され貪り食われる若くて美しい女達。

【目次】

第一章 樹海

第二章 性欲地獄

第三章 テロリスト

第四章 極上の獲物達

第五章 悪鬼達の前夜祭

第六章 生贄の女達

【本編】

第一章 樹海

時刻は夕暮れ時、鬱蒼とした森が続く樹海を、ひとりの若い女がゆつくりとした足取りで歩いていた。類まれな美貌を持つ女は、白石深雪という名であり、女子大に通いながら、妻子ある年上の男と不倫の恋に落ち、最後に捨てられた薄倅の女であった。深雪は、立ち止まり、青白い顔で辺りを見渡した。

晩秋の時期であった。心を引き裂くような美しい紅葉が、深雪を包み込んでいた。深雪は、冷たい地面に腰を下ろし、リュックサックから小さな紙包みを取り出した。中身は、

インターネットの違法サイトから入手した睡眠薬であった。

「圭吾……………」

深雪は小さな声で独り言を呟き、数十錠の睡眠薬を飲み込み、仰向けに横たわった。木々の間から、真っ赤な夕焼けが見えた。思えば寂しい人生であった。人も羨むほどの美貌を持ちながら、結局愛する男と幸せになることはなかった。

頬に一滴の涙が伝わり落ちた。深雪は胸のところで両腕を組んで、美しい瞳を閉じた。

どれだけ眠っていただろうか。深雪は薄暗

い部屋で目覚めた。ぼんやりとした記憶が残っていた。樹海の奥で自殺を図り、永遠の眠りにつこうとしたとき、見知らぬ男達に囲まれた。男達は、皆蓬髪鬚面で、木綿でできた着物と毛皮を着ており、年代物の火縄銃と腰に差した脇差で武装していた。

朦朧とした意識の中、男達は深雪を抱き起し、小さな壺に入っていた未知の液体を飲ませた。すぐに深雪は、耐えられない吐き気をもよおし、地面に胃の中の内容物をすべて吐き出した。記憶はそこで途絶えていた。

深雪は布団の上に寝かされていた。起き上



がり周囲を見渡した。十畳ほどの部屋は畳敷きであり、部屋の隅に蜀台が置かれていた。その弱い光が部屋中を微かに照らし出していた。深雪は薄絹でできた一枚の羽織を着ていた。下着はつけておらず、美しい深雪の裸身が透けて見えていた。自分が着ていた衣服や荷物は見当たらなかった。

「これは、これは、お目覚めでございますか？」

襖が開けられ、しわがれた声とともに、顔中に深い皺がある八十歳くらいの老婆が現れた。木綿の着物を着た老婆は、蒲団の近くに

正座した。

「ここはどこですか？」

深雪は、乳房を片手で隠すようにして言った。薄絹の羽織一枚では、裸同然と言えた。

「ここは黄泉の国へと通じる場所でございます。貴女様は高貴なお方である故、こちらにお連れしました」

「黄泉の国？私は死んだのですか？」

「いえ、まだ死んではおりません。一か月後、貴女様を黄泉の国へとお送りする儀式を行います」

それだけ言って老婆は押し黙った。

「一か月後？」

深雪には訳がわからなかった。自分は樹海の中で最期を遂げた筈であった。野武士のような格好をした男達と出会った記憶は残っていた。

「清めの時刻にございます」

老婆は深々と拝礼をして、部屋を出て行った。すぐに二十歳くらいの若くて美しい女達二人が入ってきた。二人とも老婆と同じような木綿の着物を着ていた。

無言で深雪の手を取り立たせてから、部屋から連れ出した。板敷の暗い廊下を歩かされ、三十畳くらいの広さがある浴場に連れて行かれた。濛々とした湯気が立ち上る中、深雪の

前で女達は着衣を脱いで全裸となった。深雪も有無を言わさぬ感じで着ていた羽織を脱がされた。

浴場は、広大な浴槽も床も壁もすべてが、檜造りであつた。深雪は床に横たえられ、湯と石鹼で女達によつて全身を洗い清められた。そのあとで、檜造りの浴槽に抱えられるようにして入れられた。

湯は適温であつた。天然温泉なのか、微かに硫黄の匂いがした。

「ここはどこなのですか？」

深雪は湯船の中で、老婆にした質問を二人の女達に問うてみた。二人の美女達は互いに

一瞬見つめあい、再び深雪を見詰めた。満面の笑みを浮かべるだけで何も答えなかった。

二人に対し異様な雰囲気を感じていた。深雪は言葉を続けられなかった。それから、再び浴槽から抱えられるようにして出され、うつ伏せに横たえられた。

今度は、全身マッサージを始めた。女達の手は、滑らかな動きで深雪の疲れを癒している。深雪はあまりの気持ち良さに、今にも眠ってしまいそうであった。

一瞬、女達の手が止められた。深雪はどうしたのかと思い、うつぶせのまま、女達を見た。二人とも深雪のむき卵のようにスベスベ

で盛り上がった白い尻を食い入るように見詰めていた。口元に光るものが見えた。深雪には唾液のように思えた。深雪の視線を感じたのか、再び女達は、手を動かした。

マッサージの後で、深雪は浴場に隣接した休憩所に案内された。十畳ほどの和室は、小さな池やシシオドシが造られた和風庭園に面していた。庭園とは格子戸で隔てられていた。

深雪が庭園をぼんやりとした表情で眺めていると、使用人の若い女が入ってきて、透明な液体が入った湯飲み茶碗を差し出した。

「飲みなされ。生が出ますだ」

「何が入っているの？」

「生が出る特效薬でございます」

深雪はそれ以上質問しなかった。一息で飲み干した。冷たい感触が、入浴後の乾いた喉を潤した。たとえ毒薬であろうとかまわなかった。自分は一度、死んだ身なのだ。生命に執着は無かった。

いつの間にか使用人の姿は消えていた。すぐに、耐え切れない睡魔に襲われた。深雪は、座布団の上に横たわり、深い寝息を立て始めた。

数十分後、深雪は全裸で布団の上に横たえ

られていた。美しい乳房が、深い寝息の度に上下していた。深雪の股間には、白衣を着た中年男が座り、むき出しにされた臍に指先をあて、内部を覗き込むようにしていた。男は服装も髪型も村人とは異なっていた。白衣の下には黒いＴシャツを着て擦り切れたジーンズを履いていた。

男が近くにいた使用人の女達ふたりに、目配せをすると、二人の女達は、深雪をうつ伏せに横たえた。むき卵のようにすべすべで美しい尻が男の視線を貫いた。男の生唾を飲む音が聞こえてきた。男は深雪のアヌスを指先で広げ、持っていたペンシルライトで、内部



を照らし出した。

暫くの間、覗き込んでいた。今にも尻に顔がつきそうだった。男は血走った視線で深雪のアヌスを見詰めながら、手で尻や太腿を撫で擦った。

「先生。どんな具合でございますか？」

近くでは老婆が、ふたりの様子を食い入るように見詰めていた。

「変な病気は持っていないな。健康体と言えそうだ。設備が無いので確定はできんが」

医者と呼ばれた男は横柄な感じで答えた。

「それは安心でございます」

老婆はそれだけ言って、立ち上がった。

使用人の女二人が、二人で深雪を両サイドから挟み込むようにして抱き上げた。男は二人の女達が深雪を連れ去る様子をももの惜し気に見ていた。

「これは診立て料です。肉は以前、せんせい医者に診てもらった香織という女の太腿肉を燻製にしたものです」

老婆は、細長い壺ふたつに紙包みを一つ置いて部屋を出て行った。襖の外から、戸板を閉め、鍵をかける音が聞こえてきた。

部屋にひとり残された男は、深い溜息をついて、細長い壺の一方を手にした。蓋をあけると豊潤な果実酒の匂いが周囲に広がった。

山ブドウを発酵させて作った葡萄酒であった。もう一つの壺には、蜂蜜を発酵させた蜂蜜酒が入っていた。男にとりどころも好物であった。壺をラツパ飲みにして、まず葡萄酒で喉を潤してから、紙包みを開けてみた。老婆の言うとおりに、燻製の色をした人間の太腿部分が入っていた。

「香織か。いい女だったな」

男は独り言を言った後で、壺に入った葡萄酒をガブ飲みした。それから燻製にされた百合の太腿肉にそのまま齧り付き、肉を噛み裂き頬張った。

「うめえ！」

男は思わず唸り声を上げていた。口内は豊潤な肉の味わいで満たされていた。男は酒を飲みながら、香織のことや、この村に住みつくこととなった経緯を思い出していた。

男の名は、大村隆介といい、都立病院で外科医として勤務していた。

年齢は四十八歳で、高校生の美しい娘と妻の三人家族であった。麻布にある高級マンションに住み、何不自由のない暮らしをしていた。

ある日、妻が運転していたベンツが、大型トラックに追突されるという事故が起きた。

妻は、娘を学校まで送る途中であった。ベン

ツは大破し、二人は帰らぬ人となってしまった。その事故が大村から人生のすべてを奪い去った。

大村は妻子を心から愛していた。ふたりのいない人生など考えられなかった。すべての氣力が奪われた。大村は職を辞し、樹海に死地を求め彷徨歩いた。

意識を失い倒れているところを村人に救われた。樹海の地底深くに存在する村は、通常であれば外部の人間を助けることは無かった。大村が医師であったことが幸いした。大村は、自殺の旅に、メスなどの手術道具を持参していたのであった。

もう何年、この村に幽閉されているのか、  
思い出すことはできなかった。何人もの若く  
て美しい女達の診察をさせられた。時には村  
人の治療も行った。

香織という女は一週間ほど前に、連れてこ  
られた女だった。人口が百人に満たない村の  
村長である老婆が言うには二十歳の女子大  
生で、大失恋の末に樹海に身を投じたとのこ  
とであった。

モデルのように美しい女であった。シミひ  
とつない白い美肌の感触を今も覚えている。  
老婆の話では、香織を数日の内に殺害し、食  
肉として解体することであった。

その日、老婆は、大村に香織を抱くことを許可した。たまにはあるが、女を抱かせてもらえた。

大村は布団の上で、意識を失い眠っている香織に抱きついた。極上の美尻を手で押し開き、サーモンピンク色のアヌスを舐めた。若い女の淫らな匂いが鼻孔をくすぐった。それだけで逝きそうになるほど、香織の裸身は美しく、エロティックであった。マンダリ返しにさせ、狂ったように膣を舐めまわした。男根が張り裂けそうになるほどに高ぶっていた。片手を腹から差し込み、香織の乳房を驚掴みにした。手に吸い付くほどの滑らかな肌触り

であった。

大村は淫らな光景を思い浮かべながら、香織の腿肉に喰い付いた。芳醇な肉の味わいが口内に広がっていく。

ここに連れてこられてから、食糧として女達の肉を与えられた。老婆は、大村に肉が女達のものであることを隠さなかった。女達の肉を食べることが、村に受け入れられる唯一の方法であった。最初は拒んだが、飢えには逆らえなかった。究極の飢えの中で、ついには肉に手を出してしまった。それ以来、好んで女達の肉を食するようになった。

時刻は午前十時を少し回ったところだ。



ふたりの若い女達が手に手を取り合い樹海の中を歩いていた。ひとりには、身長百七十七センチくらいあり、モデルのように美しい容姿をしていた。もうひとりも美人で、大きな美しい瞳を持ち、豊かな胸を持っていた。二人ともジャンパーを着てジーンズを履いていた。荷物はナップサックだけだ。二人は三日三晩死地を求め樹海の中を歩き回っていた。

いつしか、深い森は開け、荒々しい感じの岩肌が露出した場所に辿り着いた。少し歩くと、幅が五メートルほどもある豎穴を見つけた。覗いて見たが、底は薄暗く、どれくらいの深さがあるか見当もつかなか

った。

「美奈。私もう疲れちゃった。一步も歩けな  
いよ」

背が低い方の女が、地面に大の字になり、  
もうひとりの女に話しかけた。

「私もよ。曜子より疲れていると思うわ。食  
料も無くなったし」

美奈と呼ばれた女が、その女の横に座った。

「ここにしない」

寝ていた女が起き上がり、美奈の瞳をじつ  
と見詰めた。

「そうね。ここにしましょう」

「私達、死んでも一緒よね」

美奈が、曜子の少し茶髪がかった髪を撫でながら言った。

「当り前じゃない」

ふたりは抱き合い、少しの間互いの舌を求めあった。

曜子は、リュックサックから小さなガラス瓶を取り出し、蓋をあけて、数十錠の錠剤を掌に載せた。ふたりの美しい女達は、錠剤を食い入るように見詰めていた。ふたりは錠剤を分け合い、一気に飲み込んだ。

ふたりの様子を近くの茂みに隠れ見守る者達がいた。火縄銃と脇差を帯び、野武士のよ

うな格好をした二人の男達であった。ふたりは、女達が地面に横たわり眠りについたところで、動き出した。女達の口を開けさせ、小さな壺に入った液体を飲ませた。眠っていた女達は、激しく嘔吐した。意識がもうろうとしている女達を肩に担ぎあげ、樹海の中を歩きだした。

美奈は、薄暗い洞窟の中で目覚めた。藁が敷かれた隣の地面に曜子が眠っていた。曜子は一糸もまとわぬ全裸であった。美奈も自分が全裸であることに気がついた。美奈は、曜子の肩をゆすった。

「ここはどこ？何で私達裸なの？」

曜子が目を覚まし、驚きの声をあげた。

「わからない。洞窟のようだけど」

美奈は肩を震わせる曜子を抱いて、周囲を見渡した。洞窟は広さが六畳ほどで一方の壁には、太さ五センチほどの木製の格子が嵌められていた。その向こう側は広い空間が広がっているようだった。

「私達、死んだの？」

曜子は美奈にしがみ付いてきた。曜子の豊

かな乳房を胸に感じていた。

「わからないわ。死んだのかも知れないけど」

美奈は曜子を抱きかかえるようにして立ち

上がった。洞窟内を歩き、格子のところに移動した。格子の合間から、外を見渡した。そこは広さが数千坪はある地下の大空間であった。数十メートル下方に、真っ赤に燃える溶岩が見えた。その近くでは、間欠的に蒸気が噴き出していた。

それは、悪夢に出てくる地獄のような光景であった。ふたりは茫然とした表情で眼下に広がる異世界を見詰めていた。

その時、二人の前に何者かが顔を出した。

「キャ！」

二人は驚きのあまり、抱き合ったままその場に座り込んだ。二人の様子を格子の外から、



木綿の着物を着た八十歳くらいの老婆が見下ろしていた。深雪の前に現れた老婆であった。

「なんと美しい女子だろうか」

老婆はしわがれた声で呟くように言った。

「あなたは誰なのですか！私達をどうするつもりなのですか！」

美奈が叫ぶように言った。

「お前達。ここをどこだと思う？」

「……」

「地獄だよ。お前達のように自らの命を絶つか、罪を犯した者達が突き落とされる無限地獄じゃ！」

老婆が格子にしがみつく様にして、二人に向けて一喝した。

「地獄ですって！」



美奈は立ち上がり、老婆の近くに歩み寄り、老婆の顔を睨みつけた。

「威勢のよい女子じゃのう。責め甲斐があるというものよ」

老婆の両腕が格子の合間から伸びてきて、美奈の腰に回し、引き寄せた。

「何すんのよ！放して！」

美奈は老婆の腕から逃れようとしたが、老婆の力は思いの外、強靱であった。身長百七十センチ以上もある美奈が、百五十センチに満たない老婆に翻弄されていた。美奈の豊満な乳房が、格子の合間から零れ落ちた。老婆が乳房に食らいつき乳首を強く吸った。

「いや！止めて！」

美奈が悲痛な声で叫んだ。老婆は淫らな笑みを浮かべながら、乳房を吸い、剥き出しの股間を触ってきた。骸骨のような指先が無防備な膣に侵入してきた。膣壁を擦られ美奈は泣き叫んだ。アヌスにも指先が入れられ、かき回された。

身体の芯を引き裂かれるようなおぞましい感覚に思わず身震いした。

美奈は醜い老婆に口や指で犯されながら、屈辱にむせび泣いた。むき卵のようにすべすべで、盛り上がった白い尻が無残に震え慄いていた。

美奈の背後にいた曜子はただ、声をあげて泣くばかりであった。

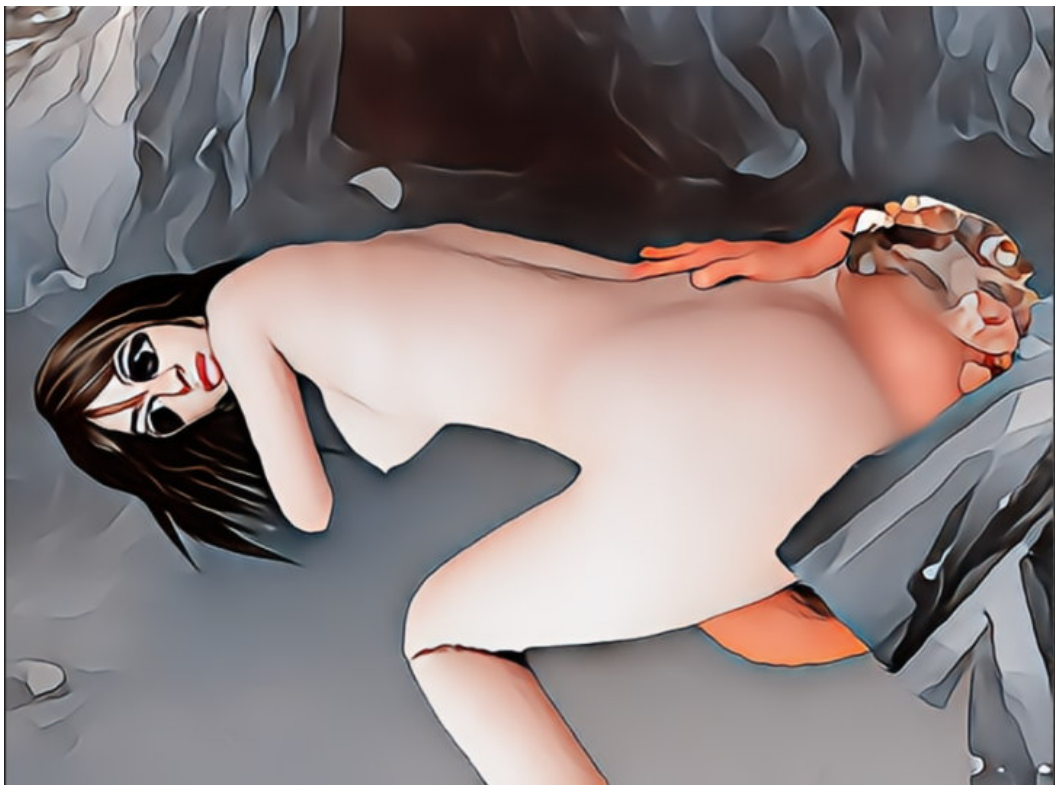
美奈への凌辱は、暫く続けられた。老婆の巧みな技のためか、美奈の泣き声は、いつしか、喘ぎ声にかわっていた。豊かな尻が老婆の指の動きに合わせてるように、猥らに動き出した。やがて、鋭い喘ぎ声を出し、老婆の手を太腿で強く締め付け、背筋を仰け反らせるようにして果てた。

老婆が美奈を解放した。美奈は力付き、その場に崩れ落ちた。老婆は着物の袂から黒い鍵を取り出し、格子にかけていた錠前を開けた。格子の一部が内側に開き、老婆がゆ

つくりとした足取りで入ってきた。老婆は悪鬼のような顔で、地面に座り泣き叫んでいた。曜子の顔を睨みつけた。老婆の黄色い犬歯からは涎が滴り落ちていた。にじり寄ってくる老婆から逃れようとして、曜子は腹ばいになり、壁の方に向かおうとした。

老婆の視線が、曜子の盛り上がった白い尻に釘付けとなった。まるで獲物を狙う野獣の目だった。老婆の口から獣のような唸り声が漏れた。

曜子に飛びつき、両手で腰を押さえつけ、尻の割れ目に顔を押し付けた。



老婆の熱い舌が、曜子のアヌスを這いまわっていた。曜子はあまりのおぞましさに気も狂わんばかりであった。必死に逃れようとするが、老婆の力は思いの外強く、なす術が無かった。揺れ動く曜子の盛り上がった尻がいつそう、老婆を刺激していた。

「止めて。お願い……許して！」

曜子は髪を振り乱し、泣き喚いた。

「曜子！」

その時、美奈が猛然と老婆に掴みかかった。

老婆の片手が美奈の鳩尾に突き刺さった。美

奈は失神し、その場に横たわった。

老婆は何事もなかったような顔をして、曜

子をマングリ返しにさせ、アヌスに指を入れながら、膣やアヌスを舐った。曜子は膣を舐られ、アヌスをかき回される衝撃に気も狂わんばかりであった。岩牢内には、曜子の咽び泣きと、ピチャピチャという膣を舐る猥らかな音が響いていた。

## 第二章 性欲地獄

曜子と美奈は、冷たい岩の上に全裸で、仰向けに横たえられていた。二人は少し前に目覚めていた。ふたりの股間には、木綿の着物を着た中年の男女が張り付き、臆やクリトリスを舐っていた。二人とも泣きはらした顔で茫然と上を見ていた。そこは、広大な広さを持つ、洞窟内であった。近くにはかがり火が燃やされ、周囲を照らし出していた。

二人の近くには、数十名の老若男女が並んでいた。皆、粗末な木綿の着物を着ていた。男達は、皆男根を剥き出しにして、美奈や曜子が凌辱される様子を見ながら、男根を扱



ていた。女達の股間からは、木製の張形が突出していた。

彼らは代わる代わる二人を犯した。男も女も容赦が無かった。女は、女の弱点を知り尽くしているが故に、的確に美奈と曜子の快感を掘り起こしていく。

さらに女達は男以上に二人を痛めつけた。二人の膣に油を塗りこみ、木製の張形で子宮の奥まで貫いた。ふたりが泣き叫び許しを請いても、薄ら笑いを浮かべるだけで二人の美しい肉体を貪りつくした。

ふたりは何度も逝かされ忘我の域を彷徨っていた。

「よいか。これが無限の性欲地獄というものよ。お前達は、女同士愛し合い、そして自らの命を絶とうとしたのじゃ。その報いをうけるがよい」

老婆が、腕組をして二人を見下ろし、高笑いを上げた。若い女が、曜子の膺に喰い付き激しい勢いで吸った。あまりの快感に背筋を仰け反らせ、鋭い喘ぎ声をあげた。美奈も中年男にアヌスを吸われていた。快感と屈辱に気が狂いそうになっていた。声を限りに泣き喚いた。

男が、美奈をうつ伏せにして盛り上がった白い尻を抱き、アヌスを貫いた。美奈の絶叫

が洞窟内に響き渡った。曜子も女に張形でアヌスを貫かれ、白目を剥いて失神した。

ふたりが意識を失っても、湯をかけられずぐに覚醒させられ、激しい陵辱が繰り返し続けられた。数十人の男女が一巡しても止められることはなかった。

彼らは意識を失った人形のような女体を犯し続けた。最後にはひとりに複数人がまとわりつき、穴という穴を犯し始めた。ふたりはあまりの快感に失神と覚醒を繰り返した。

深雪は、部屋の窓から外を眺めていた。窓といっても戸板が嵌められているだけだ。今

それは開け放たれていた。空は見えなかった。数十メートルくらい上に荒々しい岩肌が見え、数箇所の間隙から陽光が差し込み、下界を照らし出していた。町並みは、平屋造りの民家が数十軒立ち並んでいるだけだ。すべて藁葺きの粗末な感じの民家だった。人影はまばらで、閑散としていた。どこからか、甲高い金属音がしていた。村に住む鍛冶屋が、刃物か鉄砲を作っているのだろう。

近くの民家では、腰が曲がり年老いた老婆が、大鍋を使った料理の準備をしていた。

「何を作るのですか？」

美雪は、窓から身を乗り出すようにして声

をかけた。

「肉鍋じゃよ。若いメスの鍋じゃよ」

老婆はほとんど、歯の抜け落ちた口をあけて笑った。

「何の肉ですか？」

美雪は、何故か好奇心を抱いていた。

「……ホッペが落ちるくらい美味しいよ」

老婆は痴呆のような笑みを浮かべ、深雪の透き通った絹製の羽織から透けて見える乳房を食い入るように見詰めた。深雪は薄気味が悪くなった。

「深雪様。いかがいたしましたか？」

背後から、深雪を呼ぶ声が聞こえた。振り

返ると、この村で最初に出会った老婆が立っていた。老婆はこの村を仕切る村長であることを身の回りの世話をする侍女から聞き出していた。

深雪は部屋の中央にある掘り炬燵に移動した。老婆は深雪が少し前までいた窓際に立ち、外を見渡した。近くの民家で腰の曲がった老婆が、大鍋の様子を見ていた。腰の曲がった老婆は、歯の無い口を開けて、村長に微笑みかけた。

「今日は良い日和でございますね。食事の支度ができました。ご案内いたします」

老婆が、深雪の方に振り返った。老婆は深

雪の手を取り、他の部屋に案内した。その部屋も畳敷きの和室であつた。

その部屋で待っていると、すぐに襖が開けられ、二人の侍女が、料理が載つたお盆を手に見れた。深雪が座っていた掘り炬燵の上に料理を並べていく。

テーブルの上には、キノコや山菜の天婦羅やヤマメの塩焼き、マツタケの土瓶蒸し、山葡萄やコクワなどの果実それにトチの実ダンゴなどが、所狭と並べられた。

「たくさん、お召し上がりください」

老婆はそれだけ言って、深々と礼をし、出て行った。侍女も出て行き、部屋には深雪だ

けが残された。この村に連れて来られてから、  
毎日のように山菜料理を食べさせられた。肉  
類はほとんど無く、山魚の料理が一品つく程  
度で、山菜などの野菜がほとんどであった。  
白米も一度も出されなかった。トチの実で作  
られたダンゴやスイトンが米の代用品と思わ  
れた。

深雪は日に一度、村内の散歩を許された。

村は、広さが数千坪はある巨大な洞窟内に  
作られていた。天井部分にできたいくつかの  
裂け目により地上に繋がっているようだった。  
そこから差し込む陽光により、洞窟内は照ら  
し出されていた。



巨大な洞窟内に作られたこの村は、完全に世界と隔絶されていることを知った。食料はほとんど自給自足であつた。もちろん、テレビや冷蔵庫などの家電製品は無かつた。

不思議だつたのは、浴場に置かれていたボディースャンプーやリンスであつたが、その疑問も翌日には解けた。村から樹海の外に出ていた村の若者が帰つてきたのだ。

彼は大きなリュックサックを日用雑貨品で満たしていた。定期的に樹海の外に買出しに行っているらしかつた。必要な現金は深雪のような自殺志願者の所持金を使っているらしかつた。

それにしても村の存在が、まったく知られていないのが不思議であった。というより、村自体が存在を外部に知られることを極端に恐れていた。いったい、どれほど前からこの村は存在するのだろうか。男達が身に着けている脇差は、武士の名残と思われるし、火縄銃など百年以上も使われていないのだ。

深雪は想像を膨らませながら、山菜の天婦羅を箸でつまんだ。味は悪くは無かった。素材は新鮮で、粗野な料理ではあるが、深い味わいがあった。

もうひとつ、深雪には気になることがあった。後、数日に迫っているお見送りの儀式が

いかなるものかということだ。老婆は死にたいという深雪の希望を叶えると言っていた。ということは、命を絶たれるということなのだろうか。

深雪はそれであっても構わないと思っていた。深雪は一度死に掛けたのだ。この世に未練は無かった。ただ、毎日のように侍女達によつて全身を洗い清められるのには戸惑いを感じていた。彼女達の自分を見詰める視線に薄気味悪さを感じていた。深雪の裸身を洗いながら、時には、口元に涎を浮かべていることもあった。

その頃、老婆が庭で夕餉の支度をしていた庭に数十人の村人達が現れた。その中の数人が全裸にむかれた若い女が横たわる戸板を家から庭へと運び出した。女は眠っているらしく、深い寝息を立てていた。女は雪のように白い肌と長い四肢を持ち、面長で目鼻立ちが眩しいくらいに美しかった。両手を後ろ手に縛られ、足首にも紐がかけられていた。彼らは老婆に軽く会釈をした。

「ゆかりの腹の中はきれいにしたのかい？」  
老婆が歯の抜け落ちた口を開け、彼らに聞いた。

「もちろんですよ。何度も浣腸して、仕上げ

に手で腸内の宿便を救い出しましたから」

若い女が、全裸で戸板に横たわる女の肛門に指を根元まで突き刺し、抜いてから老婆の鼻先に持っていた。

「合格だね。じゃあ。そろそろ始めるよ」

老婆が目で合図を送ると、戸板に載せられていた女を大鍋の中に落とし込んだ。女の裸身が湯の中に沈んでいく。湯はまだ、温く女が火傷を負うことはなかった。女が息を吹き返し、呼吸をしようと湯から顔を上げた。両手両足を縛られているので、顔を出し続けることはできなかった。湯の中で極上の裸身が揺れ動いていた。村人は大鍋を取り囲み、固

唾を呑んでその様子を見守っていた。女の裸身は、もがき苦しんだ後で水中に没した。老婆が大量の山菜を大鍋に投じて、巨大なシャモジでかき回した。

数時間後、別の部屋では老婆や村の衆が、囲炉裏を囲み食事をしながら会合を行っていた。囲炉裏には深鍋がかけられ、グツグツと煮込まれていた。

「今回の獲物は皆、別嬪ぞろいじゃないか」  
鬚を結い脇差を差し、屈強な体付きをした中年男が、村長である老婆に笑いかけた。

「そうじゃな。あれほどまでに美しい女子が

三人とは、珍しきことよな。大神様もさぞかしお喜びなさる筈じゃ」

「しかし、器量に差がほとんど無いのに、ひとりには女神扱いで、残る二人は性奴隷とは、いかなる思し召しかな。婆さんよ」

老婆の隣に座った骸骨のように痩せ、白髪  
の翁が囲炉裏の炭を火バサミで掻き回しな  
がら尋ねた。

「それは仕方あるまいて。女神の椅子はひとつのみであるからな。たまたま、深雪が早く捕まったからよ。最後には皆、我らの食い物となる運命に変わりはないのじゃ。そろそろいい具合じゃな。食いながら話そうて」

老婆が、鍋の中身をシヤモジで掬い、お椀に入れ、フウフウと息を吹きかけ、啜り始めた。皆も老婆に習い、鍋をつつき始めた。

「やはり、若い女の肉は柔らかく、旨いのう！  
まったく、年に何人も若い女子がやってきてくれるお陰で、我らが村は飢えに苦しまなくて済むのじゃ。山の恵みだけではやっていけないわ。大神様に感謝感激じゃわい」

白髪の翁が、齒がほとんど抜け落ちた口を開け、満面の笑みを浮かべた。

「この肉は確か、ゆかりという女の肉であったな。豊かな乳房の持ち主であったのう。塩加減もちょうどいいわい。川田の婆さんが作



る女肉鍋は天下逸品じゃな」

川田の婆さんとは、近くの民家で大鍋を作っていた老婆のことであつた。村長の老婆は、肉片を租借しながら、深い溜息をついた。

「ゆかりの肉は、脂が載って口の中でとろけるわい！」

野武士姿の中年男が高笑いを上げた。

「ゆかりは数週間の間、穀類だけで育てたから肉質は最上級の筈じゃ。じっくりと噛み締めるがよい」

「お婆よ。次は、美奈か曜子か、どちらを肉にする？」

白髪の翁が、空になつた器を置いた。

「そうさな。肉つき、肉質の柔らかさは甲乙つけがたいが、曜子を捌こうと思っている」

「瞳が美しく、乳房の大きな女子じゃな。あれはいい。あそこの締め具合も最高じゃわい！」

野武士が、満面に淫らな笑みを浮かべながら、自分の器に肉鍋の中身を山盛りに盛り付け、蜂蜜酒をガブ飲みしながら、貪り喰った。

村長を囲む会合はその後、二時間以上続けられた。

「そろそろ、今日はお開きとしよう」

村長の老婆が、席を立ち、襖を開けてひと

りで部屋を出て行った。

「源蔵、お主、これから何か用でもあるのか？」

白髪の翁が、野武士の格好をした中年男に声をかけた。

「帰って寝るには、何か物足りぬな。玄宗爺さんはどうするんだ？」

野武士は蓬髪の頭を掻きながら、大きな欠伸をした。野武士の名は源蔵、白髪の翁は玄宗という名らしかった。

「それじゃあ、ふたりで女達を見に行こうか？」

「そいつはいいが、爺さんも好き者だな。あ

「うちの方は大丈夫なのか？」

源蔵が、玄宗の方に身を乗り出すようにして言った。

「ワシも八十をとうに過ぎたが、若い女子には目がなくてな」

「どうせ、体中舐めまくるつもりじゃろう？」

「それが若さの秘訣というものじゃ。ヒツヒツヒツ」

玄宗は猥らな笑みを浮かべながら、卑しく笑った。

源蔵と玄宗の二人は、老婆の家を出て、村外れに向かった。垂直に伸びる絶壁に幅二メ

1メートル高さ三メートルの横穴が穿たれていた。二人は、横穴に入った。横穴の壁には、数メートル間隔で蜀台が置かれ、内部を照らし出していた。

暫く、進むと岩でできた階段にぶつかつた。

二人とも無言で下りていく。数百段降りたところで、横穴は終わり、広さ数万坪はあると思われる巨大な空間に出た。そこも地下深くにできた天然の大洞窟であつた。周囲には硫黄臭が漂っていた。洞窟は緩やかに傾斜しており、二人は底を目指して進んだ。

洞窟の底部分には、いたる所から間欠泉が噴き出し、湯気が立ち昇っていた。中央には

溶岩の川が流れていた。それらから噴出した有毒ガスは、洞窟内を流れる気流により、地上に繋がる風穴から外部に排出されるので、ガス中毒になることは免れていた。二人は、間欠泉の合間に造られた石畳みの道を進んだ。その洞窟の反対側まで進み、再び石段を上がり始めた。数百段も上がったところに美奈と曜子が捕らわれている石牢があった。

ふたりは石牢の中を覗き込んだ。美奈も曜子も村人による限りの無い凌辱のために疲れきっていた。二人とも裸のまま、抱き合い深い寝息を立てていた。

「本当に旨そうな女子じゃのう」

玄宗が、口元から涎を滴らせた。

「どっちから抱くんだ？」

源蔵は懐から取り出した鍵で、錠前を開け

ながら、玄宗に尋ねた。

「ワシは色が白くて、背が高い方が好みじゃ」

「美奈の肌は雪のように白いな。わかった。

最初は俺が曜子を抱こう」

二人の気配に美奈と曜子は、目を覚ました。

曜子は美奈に縋りつき、泣き出した。

「もう許してください」

美奈が、曜子の肩をきつく抱き締めながら、

ふたりに懇願した。

「声もいいな。ワシは美奈の刺身が食いとう  
なつた」

「俺は曜子の乳房を喰らいたいわ」

源蔵が両手を大きく広げるようにして、美  
奈と曜子に近づいた。曜子の泣き声がいつそ  
う激しくなつた。曜子を背後に庇うようにし  
て源蔵を睨みつける美奈に黒い影が襲いか  
かった。源蔵ではなく、玄宗だった。小柄な  
玄宗は美奈の胴体に抱きつき、乳房に食らい  
つた。

「いや！」

美奈が絶叫を上げて、玄宗を振り放そうと  
するが、玄宗は枯れ木のような四肢で美奈に



強く抱きつき、離れなかった。源蔵も美奈から曜子を引きはがし、地面に横たえ、むっちりとした太腿を大きく開かせ膣に食らい付いた。すぐに膣を舐る厭らしい音が石牢内に響いた。その傍らでは玄宗が、美奈を腹ばいにさせ、深い尻の割れ目に顔を押し付け、アヌスを舐っていた。

源蔵が動いた。木綿の着物を脱いだ。下着はつけておらず、筋肉隆々とした肉体が露となった。曜子を軽々と抱き上げ、盛り上がった白い乳房に喰い付き、乳首を強く吸った。曜子の豊満な裸身が源蔵の逞しい腕の中で揺れ動いていた。

一方、玄宗も裸になり、仰向けに横たえた美奈の股間に顔を入れ、膣を舐っていた。玄宗の肉体は肉がほとんどついておらず、まるで骸骨のようであった。

気丈な美奈も、醜い老人に抱かれる悔しさに嗚咽を漏らしていた。玄宗の骸骨のような指が、美奈の美しい乳房を鷲掴みにしていた。

源蔵が曜子の口を無理やり開けさせ、男根を喉の奥まで突っ込んだ。以前、源蔵は樹海を彷徨っていた美しい女を村に連れ戻り、一時期性交奴隷として飼っていた時期があった。

その女は何故か源蔵のことが好きになり、よく口腔性交で源蔵を楽しませてくれた。そ

の女は既にこの世にはいなかった。村の仕来りで、外界の美しい女は、村の食料となるところが運命つけられていたのだ。

源蔵は自ら愛する女を手にかけて、その肉を貪り食らった。今でも時々、悪夢にうなされることがあった。

その時以来、源蔵は拉致した女を抱く際は、必ず口を犯した。源蔵は苦しそうに男根を口に受け入れる曜子の髪を驚掴みにしながら、尻を前後左右に動かした。やがて、低い呻き声を漏らして、曜子の口内に放出した。

「すべて、飲み干すのじゃ！」

曜子は嗚咽にむせびながら、源蔵の精液を

飲み干した。ぐったりとした曜子を抱き寄せ、地面に座った。傍らで犯されている美奈の様子を曜子の尻を撫でながら楽しんだ。玄宗は、美奈の深い尻の割れ目に顔を押し付け、アヌスを舐っていた。何度舐めても飽きることはない素晴らしい尻であった。美奈はもはや泣いてはいなかった。既に何度か、口と手で逝かされており、茫然とした表情を浮かべていた。美奈の美しい尻は玄宗の愛撫に合わせるように猥らに動いていた。その様子を食い入るように見詰めていた源蔵が、抱き抱えていた曜子を地面に四つん這いにさせ、背後から

貫いた。

玄宗と源蔵は、女を取り換え何度も犯し抜いた。女達の裸身が精液や唾液により汚れてきたら、石牢から連れ出し、近くに造られた洗い場で女達を洗い清めた。広さ十畳、深さ五十センチほどの縦穴には、地中から湧き出した湯が満たされていた。源蔵と玄宗は、女達の裸身を湯に浸し、身体の隅々まで、特に股間を念入りに洗った。女達は、諦めきった表情で為すがままの状態であった。乳房や股間を触られる度に、低い喘ぎ声を出した。

### 第三章 テロリスト

午後三時過ぎ、樹海の一端に接するように作られた高規格道路を二台の乗用車が追跡劇を続けていた。追いつがるベントを必死の思いで引き離そうとするジャガーには、二人の男女が乗っていた。運転席では精悍な風貌をした三十代後半の男が、ハンドルを握っていた。

助手席では二十代半ばくらいであり、サングラスをかけた女が、窓から身を乗り出すようにして、追走するベントめがけて、自動拳銃を乱射していた。女はサングラスをかけていても、わかるくらい的美貌の持ち主であった。

た。

二人は、世界的なテロリスト組織に属する  
職員であった。男の名は郷田亮太。女は、  
男の愛人でもある三枝香奈という名であった。

一方、追走する車両には、警視庁公安部所  
属の工藤真弓が運転席でハンドルを握ってい  
た。助手席には、同じ職場の新人刑事である  
香田里奈が、前方を走るジャガーに向けて、  
シグザウエルで応戦していた。二人とも超が  
つくほどの美女だ。ふたりは、テロリストで  
ある郷田と香奈が、来日して以来、後を追っ  
ていた。

二台の車両は、ワインディングロードを、

タイヤを軋らせながら、爆走していた。ちよ  
つとでもハンドル操作を誤れば、数十メー  
ルの崖下に転落する危険があったが、二台と  
も速度を緩めることは無かった。

里奈が放った一発の銃弾が、三十メートル  
前に行くジャガーの後ろタイヤを撃ち抜いた。  
ジャガーは、パンクの衝撃でバランスを失い  
大きく蛇行した。

大きなカーブに差し掛かっていた。郷田は  
迫りくる絶壁を避けるために、咄嗟に大きく  
ハンドルを切った。ジャガーはタイヤを軋ら  
せながら、ガードレールを突き破り数十メー  
トル下の崖下に向けてダイブした。



幸運にもジャガーは大木の枝に捕えられ、速度を削がれた状態で何本もの雑木を薙ぎ倒しながら、谷底に転落していった。

真弓が運転するベントは、引きちぎられたガードレールの近くに急停車した。真弓と里奈は、車両から飛び出し、二人並んで崖下を覗き込んだ。テロリストを乗せたジャガーが大破を免れ、崖の途中で止まっていた。驚いたことにふたりのテロリストは生きていた。木々の枝が車両にまとわりつくことで速度が削がれ、また衝撃でエアバックが動作したところが幸いしていた。

ドアが開けられ、ふたりが崖に繁茂する

木々を伝いながら、崖下に降りていく様子が一瞬見えた。里奈が持っていたシグザウエルを二人に向けた。銃声が黒々とした樹海に吸い込まれた。ふたりの姿は、すぐに、木々が繁茂する樹海の奥へと消えた。

「警視。取り逃がしましたね」

里奈はがつくりと肩を落とした。

「まだ、諦めては駄目。勝負はこれからよ」

真弓は里奈の肩を抱いて、慰めるように里奈の茶色がかったセミロングの髪を撫でた。

真弓と里奈は、ベンツの後部座席に載っていたアタッシュケースを取り出した。中に納められていた迷彩服を身に着け、ジャングル

ブーツに履き替えた。二人は、自動拳銃のシグザウエルP二二六とヘッケラー&コッホ社製高性能サブマシンガンのMP五で武装した。MP五の銃身には、四十ミリ擲弾発射器であるM二〇三グレネードランチャーが装着されていた。三日分の食料と弾薬が入ったリュックを背負った。

「行くわよ」

真弓は、ザイルを崖下に垂らし、それを使って崖を降りはじめた。里奈がそれに続いた。

その頃、テロリストである郷田と香奈は、樹海に作られた獣道を無言で歩いていた。郷

田は、右肩にキャリコム九五〇コンバットモデルを吊り下げていた。キャリコム九五〇とは九ミリ弾を百発装弾可能なサブマシンガンである。腰のベルトには、回転式拳銃のコルトパイソン三五七マグナムを無造作な感じで差していた。一方、香奈は自動拳銃のベレッタ九二FSで武装していた。

「亮太。私疲れちゃったよ。もう歩けない」  
高級モデルも及ばない美貌を持つ香奈が  
駄々をこねた。

「しょうがない女だな。お前は」

郷田は溜息をつきながら、香奈を背負った。  
身長百九十センチ、体重九十キロで鍛え抜か

れた体躯を持つ郷田にとり、香奈の体重など問題では無かった。

「後で、しゃぶってあげるわね」

香奈が郷田の耳元で囁くように言った。

「ああ、たつぷりと楽しませてもらうぜ」

郷田はふてぶてしい笑みを浮かべた。筋肉で覆われた逞しい背中に香奈の豊かな乳房を感じていた。

そのまま暫く進むと、前方に人影が見えた。

郷田は香奈を地面に下ろし、キャリコム九

五〇をかまえ、ゆっくりと近付いた。

ジーンズにジャンパー姿の若い女が、大木の根元で上を向いて佇んでいた。彼女の視線

の先には、大木の枝から吊るしたロープがあった。ロープの先は輪になっていた。

「こんなところで何しているの？」

香奈が女に走り寄って、声をかけた。女を見つめる香奈の瞳が輝いて見えた。

「な、なんでもありません」

女は、細面で切れ長の美しい二重瞼を持っていた。身長は香奈より少し高く百七十センチくらいだ。年齢は二十代前半といったぐらいだ。

「あんだ。ここで死ぬつもりだったんでしょ？」

「……」

「あんたみたいいな美人が、ただで死ぬのはも  
つたいないわよ。そうでしょう亮太？」

香奈は満面の笑みを浮かべながら、郷田に  
同意を求めた。郷田はふたりのやり取りを、  
腕組をしながら見ていた。口元には冷たい笑  
みを浮かべていた。

女はふたりの異様な雰囲気恐怖を感じ  
ていた。郷田が手にしているサブマシンガン  
から目が離せなくなっていた。

「あんた本当にきれいだね。ぞくぞくするわ」  
香奈が、女に近付き、女の乳房を服の上か  
ら揉みながら耳元で囁くように言った。

「……」

女は蒼白な顔で俯いているだけだ。肩先が微かに震えていた。

「亮太。ちよっと楽しんでいいでしょう？」

「ああ、あんまり時間をかけるなよ。奴らが追ってくるかもしれないからな」

「了解！」

香奈は、茫然と佇む女に飛びかかった。強く抱き締めて、強引に唇を奪った。女は両目に涙を浮かべ、香奈から逃れようとしたが、香奈の方が、筋力が強かった。香奈は自分より背が高い女を軽くあしらっていた。ジャンパーを引きはがし、Tシャツも脱がせた。ピンク色のブラジャーを筆り取った。形の良い



きれいな乳房が零れ落ちた。

「やめて！」

女は樹海に響き渡るような絶叫を上げた。

郷田がゆっくりとした動作で女に背後から近づき、羽交い絞めにした。両手の自由が奪われた女は、ジーンズのベルトを外され、尻の方から脱がされた。香奈はピンク色のパンテイに顔を押し付け、クンクンと犬のように鼻を鳴らした。

「懐かしい匂いがするよ」

女の盛り上がった尻に両手をかけ、パンテイを引きずり下ろした。

「美味しいそうじゃん！」

香奈は満面の笑みを浮かべ、女の尻を両手で押さえるようにして、膣に口をつけ、激しい勢いで舐り始めた。時より、女の様子を楽しむように上目使いになりながら、舌を動かしていた。女は同性に犯される屈辱に黒髪を振り乱し、声を出して泣いていた。

数分後、香奈は地面に四つん這いにさせた女の背後から、抱きつきアヌスを舐っていた。両手は忙しく女の膣や乳房を這いまわっていた。女は何度か逝かされたのか、虚ろな視線で、香奈の舌の動きに合わせるかのように低い喘ぎ声を上げていた。

「そろそろ交代しようぜ」

郷田がズボンを脱いで、そそり立つ黒々とした男根を露にさせた。

「いいよ。たっぷり出してやって」

香奈は女の下に身体を入れ、仰向けになつて女の乳房を吸い始めた。郷田は女の腰を両手で押さえつけるようにして男根を挿入した。女が仰け反るようにして、喘ぎ声をあげた。

郷田は激しい勢いで腰を前後左右に動かした。

数分後、郷田が低い呻き声を上げながら、女の膣に放出した。少し経つてから、郷田は、地面に腹ばいになり、さめざめと泣き続ける女の白い尻に噛みついた。

「ギャー！」

香奈も追い打ちをかけるように乳房を強く  
噛んだ。ふたりが顔を離すと、尻と乳房にく  
つきりと歯形が浮かんでいた。白い尻が無残  
に震え慄いていた。

「この女どうする？」

「顔を見られているからな……」

郷田はズボンを履きながらのんびりとし

た調子で答えた。

「殺っちゃう？」

香奈が女の膺を指先で犯しながら、郷田に

尋ねた。

「女は死ぬためにここに来たんだ。俺達が手  
を貸してやろう」

「あんたが人助けなんて、柄じゃ無いわね」

「俺は、本当は善人なんだぜ」

郷田は女の脇に手を入れ手抱き上げた。

「ちよつと待って。もう少しだから」

香奈が空中に吊下げられた女のアヌスと膣に激しく指先を出し入れした。女が齒を食いしぼり、黒髪を振り乱し喘ぎ続けた。不意に全身を仰け反らせ、股間から大量の潮を吹きながら郷田の腕の中で果てた。

「処刑の時間だ」

郷田の暗く陰鬱な声が聞こえてきた。香奈が、郷田の肩の上に登り、頭上のロープを掴んだ。郷田が女の脇を両手で掴んで高く抱え

あげた。香奈が、あつという間に女の首にロープの輪をかけた。

一方、捜査官の真弓と里奈も彼らの後を追って、樹海に分け入っていた。彼らから数キロほど後方にいた。

「方角はこっちで正しいのでしょいか？」

里奈が前に行く真弓に声をかけた。

「たぶん。こっちだと思うわ。ほら、折れたばかりの枝があるわ。それにあれは足跡よ」

真弓は立ち止まり、前方を指差した。真弓が言うように少し前に人が通った痕跡が見つかった。凶悪なテロリストであつても山歩き

は素人に等しかった。

「暗くなってきましたね」

「そうね。今夜は野宿になってしまいそうね」

二人の女達は、木々の合間から零れ落ちる

夕陽を恨めしそうに眺めた。

「行きましょう」

真弓は都会育ちである里奈の不安を感じ

取り、里奈の手を握り締めた。里奈は、真弓

の手を握り返した。ふたりは恋人のように、

寄り添うようにして、獣道を進んだ。暫く進

んだ時、真弓が足を止めた。

「どうしたんですか？」

里奈は真弓の視線を追った。ふたりの前方

に白いものが見えた。

「いや！」

里奈は小さな悲鳴を上げて、真弓の背中にしがみ付いた。彼女達が目にしたのは若い女の首吊死体であった。女は全裸で目の前にぶら下がっていた。地面には女の排泄物が散乱していた。

「大丈夫よ。落ち着いて」

真弓は里奈をなだめながら、周囲の様子をさっと見渡した。女は全裸であるのに、周りにはあるべき筈の衣服や荷物が見当たらなかった。

先に行くテロリストが、奪って行ったのだ



ろう。真弓は女の足に触ってみた。まだ、微かに温かかった。死後僅かの時間しか経過していないようだ。だとすれば、女はテロリストと遭遇している可能性がある。

真弓は女の正面に回り、下半身を調べた。思ったとおりであった。太腿に精液がこびりついていた。真弓は、女の死に顔を見た。思わず目をそむけた。眼球が飛び出していたのだ。背後では里奈が地面に両手をつき、嘔吐していた。

奴らはこの女性を犯した後に、ロープを首にかけ木に吊るしたのだ。人間の仕業とは、とても思えなかった。あまりの残忍な手口に

真弓は激しい怒りを覚えた。

数分後、真弓は里奈の肩を抱きながら、追跡を再開した。数十メートル進んだところで、再び真弓が歩みを止めた。

「どうしたんですか？」

里奈は息を止め、真弓の顔を見詰めた。真弓は足下をじっと見詰めていた。

「動かないで。じっとしていてね」

真弓はささやくように言って、しゃがみこんで地面の草むらをそっとかき分けた。里奈にも細いワイヤーロープが張られている様子が見えた。

「ゆっくりと、戻るわよ」

ふたりは細心の注意を払いながら、十メートルほど後退した。真弓は地面に落ちていた枝を手にした。それを先ほどの地点に向けて投げつけた。

「伏せて！」

ふたりが地面に腹ばいになった瞬間、大地を揺るがすような轟音がして閃光が走り抜けた。爆風とともに粉塵や木切れが宙を舞った。

「大丈夫？怪我は無い？」

真弓は隣でうつ伏せになっていた里奈の背中や腰を触った。

「私は大丈夫です。警視は大丈夫ですか？」

「私も何とか大丈夫みたい……」

真弓は言いながら、里奈の唇に指先を当てた。里奈が何事かと聞こうとしたが、真弓は首を振り、それを遮った。すぐに藪をかき分ける音が聞こえてきた。

「女刑事達はふっとんじまったようだな」

「これだけの爆発よ。生きている訳無いわ」

「ふたりとも超がつくほどのいい女だったな。

殺す前に味見をしたかったぜ」

「アタイもあいつ等のマ\*コ舐めてみたかったな」

数十メートル先の方から男女の声が聞こえてきた。真弓達が追っているテロリスト達に

違いなかった。真弓達の生死を確認するために戻ってきたのだろう。

真弓はゆっくりと両手で上体を支え上げた。二十メートルほど先に人影が見えた。細心の注意を払いながら、MP五の安全装置を外した。

「お前達を大量破壊、大量殺人容疑で逮捕する！」

真弓は絶叫しながら、サブマシンガンの引き金を引き絞った。連射音とともに木々の小枝が砕け散った。間髪を入れずに、敵は応戦してきた。真弓は腹ばいになりながら、予備の弾装を入れ替えた。頭上を敵の銃弾が通過

していく。

里奈がいないことに気がついた。腹ばいになりながら、周囲を確認すると、里奈が大木の根元に張り付くようにしているのが見えた。里奈はMP五の銃身部分に装着した四十ミリ擲弾発射器であるM二〇三グレネードランチャーの引き金を引いた。

四十ミリ擲弾は、テロリスト達が潜む藪の手前にある大木の枝にあたり、大きく弾道がそれてしまった。テロリスト達のはるか後方で大音響を上げた。

それっきり、敵からの射撃がストップした。真弓は立ち上がり、テロリスト達の姿を追っ

た。彼らが、逃げ出している様子が木々の間から一瞬垣間見えた。

「取り逃がしたようね」

真弓は額に流れる冷汗を手の甲で拭きながら、里奈の方に移動した。

「敵もサブマシンガンを保持しているようです」

「そうね。怪我は無い？」

「大丈夫です。警視は？」

「私も無事のようにだわ」

その頃、樹海の地底に作られた村では、村

長の老婆が、葉で眠らせた深雪を凌辱していた。シミひとつなく、真っ白な裸身が布団の上に仰向けに横たえられ、老婆が深雪の太腿の間に座り、臈を一心不乱に舐めていた。女神の地位にある深雪を意識がある状態で犯すことはできなかつた。

女神と崇められる深雪を抱くことは、村長である老婆の特権であつた。老婆は深雪の臈を舌で堪能していた。何度舐めても飽きるほどのない素晴らしい舌触りであつた。これほど美しい女の肉は、どれほど美味しいのだろうかと老婆は考えていた。

その時、大地を揺るがすような轟音がした。



「何事じゃ！源蔵を呼べ！」

老婆が部屋の隅で控えていた下女に、楽しみを邪魔されたためか、忌々しげな口調で命令した。下女は一礼して部屋から走り去った。

数時間後、板張りの一室で野武士の格好をした源蔵が、村長の老婆に何やら報告をしていた。その場には医師の大村も同席していた。

「森で四人の男女を見つけた。俺はいつものように肉を探していたんだ。そしたら奴らが現れた。二人の男女を、二人の女達が後を追っていたようだった。女は皆、美人揃いだっ  
たな」

「奴らは敵同士なのか？」

「俺にはそんな風に見えたが」

「奴らは武器を持っているのか？」

老婆が矢継ぎ早に質問した。

「ああ、持っていたな」

「どんな武器だ？」

「見たこともない武器だ」

「源蔵、これに書いてみる」

源蔵が、わら半紙に筆で武器の形を描き始

めた。

「それはサブマシンガンという武器だな」

近くに座り、ふたりの会話を聞いていた大

村が身を乗り出してきた。

「サブ……。何じゃそりゃあ？」

「強力な武器だ。何発も続けて撃つことができる。火縄銃なんかで対抗できる相手ではな

い」

「そうか？」

老婆は腕組をして目を閉じ、暫く黙りこんだ。

「ワシに妙案がある。美奈をここに連れてこ  
い」

部屋の隅で控えていた下女に命令した。

数十分後、美奈がふたりの下女に両脇を抱えられるようにして連れてこられた。美奈は

一糸もまとわぬ全裸姿だった。美奈は不安な面持ちで、周囲の様子を見ていた。

「そこに寝かせるのじゃ」

美奈が板敷の床に、仰向けの姿勢で横たえられた。

「何をする気なの？」

美奈は二人の下女に両手両足を押さえつ

けられ、身動きが取れなかった。

「お前に知る必要など無い」

村長の老婆は、年代物の和箆笥から小さな

壺を取り出してきた。

「ここはどこ？ 私には地獄のようには見えな

いけど」

美奈が顔を上げて、老婆を睨みつけた。

「お前に地獄の何がわかるというのじゃ？」

老婆が、壺の中に箸を入れ中身を軽く掻き回しながら美奈の両足を抑えていた下女に何やら目配せをした。下女は美奈の両足を大きく開かせた。サーモンピンク色のきれいな膣が露になった。

「何なのよ？」

美奈は、その場の異様な雰囲気恐怖に怖れ慄いた。その箸の先を美奈の膣部に挿入し、内部を掻き回した。

「何？」

透明の液体がついた箸で、膣内部をかき回

される感触に怖気が走った。それもつかの間であった。一瞬で意識を失った。美奈は大腿を広げられた状態で深い寝息をたてはじめた。「腹ばいにさせるのじゃ」

老婆が再び、下女に命じた。うつ伏せに横たわる美奈の尻を下女に開かせ、アヌスにも箸を差し込んで、壺の中身を直腸内に塗り込んだ。最後には乳房にも塗り付けた。

「そういう訳か？確かに妙案だな」

近くで食い入るように、その様子を見詰めていた大村が感心したように頷いた。同じように一部始終を見ていた源蔵は、納得がいかないような顔をしていた。

「源蔵。お主にはまだわからぬのか？美奈の膣と肛門と乳房に塗り付けたのは、強力な催眠薬じゃ。粘膜をとおして体内に浸透する筈じゃ。これほどの女だ。男が見たら、ほっておくまいて」

「そういうことか！」

源蔵が両手を叩いて、顔をほころばせた。

一時間後、陽は完全に沈み真っ暗闇となっていた。郷田は香奈を背負い、ペンシルライトを頼りに、獣道を進んでいた。香奈は、先ほど殺害した女が着ていたジャンパーとジーンズに着替えていた。

「何だ？あれは」

郷田は急に進むのを止めた。

「何なの？」

香奈は、郷田の背中から降りた。郷田が持つペンシルライトの弱い光が、地面に横たわる人影をとらえていた。郷田は、サブマシンガンのキャリコム九五〇コンバットモデルを倒れている人影に向けながら、ゆっくりと近づいた。

うつ伏せに倒れているのは若い女のようなだった。銃身の先で女の背中を突いた。何の反応も無かった。ただ、女の深い寝息が聞こえてきた。



郷田は女を仰向けにひっくり返した。倒れていたのは美奈であった。村に拉致される前に着ていた衣服を身につけていた。

「今日についてはいるぜ」

「本当ね。こんな美人、見たこともないわ。

ねえ、ここで休憩しない？」

「今日はこれ以上先には進まない。ここで野宿するしかないな」

郷田は、先ほど首を吊って殺害した女が持っていたリュックを開けた。中には二人用のテントや寝袋、それに数日分の食料が入っていた、郷田はハムを齧りながらテントを設営した。テントの中に美奈を運び込んだ。

狭いテントの中で二人は、美奈の衣服を脱がし始めた。すぐに眩いばかりの裸身がペンシルライトの弱い光の中に浮かび上がった。

「先に味見していい？」

香奈が大きな瞳を輝かせた。

「駄目だ。今度は俺の番だぞ」

郷田は上ずった声で答えた。口にペンシルライトを咥え、眠り続ける美奈の太腿を押し広げた。サーモンピンク色のきれいな膣が郷田の視線を釘付けにした。思わず、口をつけていた。若い女の素晴らしい匂いが鼻孔に広がり、眩暈がしそうだった。すぐに激しい勢いで舐り始めた。香奈も美奈の乳房を舐めて

いた。そのまま、ふたりは美奈の裸身の上に崩れ落ち、深い寝息をたてはじめた。

その頃、真弓と里奈は郷田達のテントに近づいていた。郷田達への強い怒りが、二人を支えていた。真弓は必ず捕えてみせると心に誓っていた。

数十メートル先にテントが見えた。テントの近くには、焚き火が燃えておりその光がテントを闇の中に浮かび上がらせていた。

ふたりは息を殺しながらテントに近づいた。テントから男の足がはみ出して見えた。足の近くには、サブマシンガンが転がっていた。

テントの主が郷田達以外に考えられなかった。不思議なのは、彼らがまったく警戒していな  
いかのように見えることだった。

「郷田亮太に三枝香奈。お前達を大量殺人容  
疑で逮捕する！」

真弓と里奈はテントにサブマシンガンの M  
P 五で狙いをつけた。何も反応が無かった。  
真弓が、M P 五を構えながら、テントに近づ  
いた。テントから飛び出している郷田の足を  
銃身の先で突ついた。足はピクリとも動かな  
かった。

意を決して、テントの入り口を片手で大き  
く開けた。内部に三人の男女が倒れている様

子が見てとれた。三人とも深い寝息を立てていた。

真弓と里奈はふたりに協力して、まず、大柄な郷田をテントの中から運び出した。次に香奈を外に出した。ふたりとも息があり、死んではいなかった。眠っているだけのようだ。真弓は二人に手錠を嵌めた。

「この女性は、どうしたのでしょうか？」

里奈が、テントの中で眠り続ける女を見詰めた。

「たぶん、自殺者のひとりよ。郷田達に捕まり、この場所で犯されていたのよ」

ふたりが見ていた女は美奈ではなかった。

美奈の世話をしていた下女の紅葉であった。

「里奈ちゃん。彼女に怪我が無いか確認して。

私は周りの状況を見てくるわ」

真弓は焚火の近くに転がっていた鍋を見つけた。鍋の底にはキノコが付着していた。

「ニガクリタケだわ」

真弓は思わず独り言を言っていた。ニガクリタケとは猛毒を持つ毒キノコであり、食すると幻覚、昏睡状態に陥り、絶命する場合もあった。これで疑問は解けた。郷田達は、この毒キノコを食べ、意識を失って倒れていたのだ。

「里奈ちゃん。こっちに来て」

返事は無かった。

「どうしたの？」

真弓はテントの中を覗き込んだ。さっきまで眠っていた女が、真弓の足に長さ二〇センチほどの針を打ち込んできた。真弓は一瞬で意識を失った。

「よくやったぞ。紅葉。お手柄だ」

源蔵が、村の衆を引連れて、木々の間から出てきた。テントの中で真弓に眠り薬を塗った針を刺した女が飛び出してきて、源蔵に抱きついた。

「オラ、怖かっただ」

「本当によくやった。今度の村祭りでは、好

きなだけ肉が食べれるぞ」

「嬉しい。女子の肉は何よりの好物だ」

「しかし、源蔵よ。お前も知恵者じゃの」

村長の老婆が近くに立っていた。

「毒キノコのことか？後から来る女達を油断

させるためには、あれくらい仕組みぬとな」

「確かに、そのとおりじゃ。それにしても大

漁じゃわい。当分、肉を切らすことはないな」

村人達が、真弓と里奈それに香奈を全裸に

剥いて、地面に横たえた。美奈もその横に横

たえられた。美しい四人の女達が全裸で横た

えられた様は壮観な眺めであった。村人達が

その周りを取り囲んだ。



「男はどうする？不味くて食えないぞ」

源蔵が郷田を指差した。郷田も全裸に剥かれ、女達とは離れた場所に横たえられていた。

「大そう、立派な一物の持ち主じゃな。そうそう、種馬にしよう。村も最近血が濃くなりすぎた。新しい血をいれるときじゃ。紅葉。ちよつと来なさい」

老婆が、途中から美奈に扮していた紅葉を呼んだ。紅葉という女は、美しい目鼻立ちをしていた。年齢も二十歳くらいに見えた。

「御婆様、何でございましょう？」

「今日からあの男をお前の亭主とする。りつぱな子を産むがよい。よいな？」

「はい。仰せのままに」

紅葉、意識を失っている郷田の黒々とした男根をじっと見詰めていた。

第四章 極上の獲物達へと続く